島根大学教育学部紀要（教育科学）第30巻　1頁～8頁　平成8年12月

直信流柔道について．I

藤　岡　正　春

Masaharu FUJIOKA

JIKISHINRYU JUDO I

［キーワード：起倒流，直信流柔道，技法，名称］

1．はじめに

加納治五郎は，明治22年の大日本教育会での講演「柔道一班並に其教育上の価値」の中で次のように述べている。柔術について「柔術は元来の目的は勝負の法を練習するところで御座いました（中略）唯々幾分かの改良を加えてさえすれば，柔術は體育智育徳育を同時に為すことの出来る一種の便法となることが出来る」[1] と言い，柔道について「数年間工夫を凝らし遂に一種の講道館柔道というものを拵えました（中略）其柔道と申すものは體育勝負修心の三つの目的を盛っておりまして」[2] と言って，体育，勝負，修心の三つを習得することが講道館柔道の修行目的であると言っている。

この体育，勝負，修心の三つの目的について，大滝は「東京大学で受けたフェノロサの哲学史の授業など，当時の最先端の教育の影響も考えられる。明治の教育界に浸透していたスペンサーの教育論などを学び，いわゆる知育・徳育・体育の三育主義に通ずる全人として調和のとれた教育を考えるに至った」[3] と言い，佐々木も「教育者であった加納は，ハーバート・スペンサーの知育，徳育，体育の三育論を取り入れ，柔道に三っの目的を持たせたのである」[4] と言って，柔道の修業目的にハーバート・スペンサーの教育論（三育論）が大きな影響を与えたと言っている。

また，柔道は柔術に幾分かの改良を加えて拵えましたと言っているように，加納は福田八之助，磯正智に天神真楊流を学び，更に飯久保恒年に起倒流を学び，この両流の柔術を中心にして柔術諸流の長所と自らの工夫を加えて講道館柔道を創始したと言われている。

この起倒流系の柔術である松江藩の直信流柔道について福田は「唯技術のみでなく修心・体育・武術の三目的を考えられたもので，勘右衛門が単に武術として発達した柔術にかような高遠な理想をつけて術より道に進み，乱取を主とせず精神修養を主とした功績は史上無比の英傑である。即ち松江藩の直信流柔道は我が国最古の柔道の起源であり講道館柔道の淵源をなすものである」[5] と言っている。この事からも講道館柔道は，ハーバート・スペンサーの教育論以上にあらゆる面から柔術諸流，中でも起倒流系の影響を大きく受けていると言える。

この起倒流系の柔術である直信流柔道についての研究は綿谷雪（武芸流派大辞典），福田明正（雲藩武道史），山本義泰（柔術の技法と思想），藤堂良明他（直信流柔道について）等があるが「直信流柔道の詳しい歴史や内容についての研究はあまりなされていない」[6] のが実状である。

そこで本研究は，まず直信流柔道の「直信流柔道業術寄品巻，直信流柔道中央書の序，直信流柔道業術書，直信流柔道業術名目」等の資料や文献により，直信流柔道の成立，名称や技法について考察する。

2．起倒流及び直信流柔道の成立について

直信流柔道は起倒流系に属する柔術である。起倒流は茨木専斎俊房を流祖とする柔術である。流祖，茨木専斎俊房は柳生但馬守宗矩の門人である。また同門の福野七郎右衛門正勝は柳生石舟斉宗厳の門人であり，後に寺田平左衛門定安に軍陣組討貞心流和術を習い，これに柳生新陰流の剣理に内在する和（やわら）（柔の理）に茨木専斎の協力を得て工夫を加え「和の事，是は七郎右衛門工夫により目録とす。此一流良移心当流和と云」[7] とあるように，

柳生石舟斉宗厳の許しを得て良移心当流和（元和８年．1622）を創始する。さらに「陳氏の（中略）国昌寺滞留は寛永２年(1625)４月から同年９月16日までであったが，その宿泊を契機として福野七郎右衛門正勝（中略）三武術士と国昌寺関係の柔術僧らに拳法を伝授し」[8] とあるように，陳元贇より拳法を伝授される。この事について本朝武芸小伝の巻之十，拳に「陳元贇かたりて大明に人をとらふる術あり，我其術しらずといへど能其技をみつると云，三人の士，其術を聞き，みずから其技を工夫し出して，後能其事に熟せり（中略）この術の理は，柔にして敵とあらそわず，しばしば勝たむ事を求めず。虚静を要し，物をとがめず，物にふれ動かず，事あれば沈みて浮かばず，沈を感ずると云ふ。凡そ調息を要とす」[9] とある。これによると陳元贇は“我其術しらずといへど能其技をみつると云”と言っているが「陳元贇は一年一ケ月の短期修行をもって少林寺を下山した」[10] と言われ「入山したからには拳法の極意に達せずば死すとも退山をみとめられぬ不文律がある」[11] と言われていることから，少林寺拳法の極意に達していたと考えられる。このことからも福野は国昌寺において陳元贇から中国拳法の五拳（心を練る龍拳，骨を鍛える虎拳，力を鍛える豹拳，気を養う蛇拳）の技法，さらに「凡そ調息を要とす」とあるように，立禅や気功，内功等の調息の法について伝授されたと考えられる。そしてこれらのことを参考にして吟味・修正・改良し，良移心当流に付加してたと考えられる。

そして「乱の事又左衛門工夫の目録，起倒流乱目録」[12] また「右之一巻は兵法の心持を以，奇妙得心誠に神妙にかなへる処なり。然ども尋人，たよりなきにより，名を乱と名付，右之一巻を書して心持を沢庵へ御物語申せば，則起倒流とあそばし，習の心持に模稜手と名付給也（中略）兵法の以鍛練自由分別，乱起倒流と相定候義（中略）寛永十四年丑午極廿九日，茨木又左衛門方へ遣す」[13] とあるように，福野の良移心当流を工夫改変し，さらに鎧組討，棒，居合，陣鎌などを付加して寛永14年（1637）乱を創始，これに沢庵禅師が起倒流と命名した。

福野は京都板倉家に仕える師定安の弟寺田八左衛門頼重を訪ねて自ら研究工夫した良移心当流と茨木専斎との共同研究により得た合作の福野流柔術を伝える。

寺田勘右衛門正重満英は父定安から貞心流和術を学んでその奥義を極めたが，武者修行を志し，家督を弟定次に譲り，京都の伯父頼重を訪ねる。そして叔父頼重より良移心当流（福野流）を学びながら刀槍弓馬及び諸家の戦法を学び，頼重のもとを去って武者修行に出る。更に深山に籠り仙人より長生の方を伝授され，その用の万変にも応じ得る極りなき道を悟る。是より禅を沢庵に学び，不動体・不動智の妙利を発明する。また林道春に儒を学び，遂に直心流柔術を創始した。開祖・寺田勘右衛門正重満英碑『桃好裕節山　撰書』（清光院・松江市）には次のように記されている。「これを修練すれば不動智の位に至り，心虚して千変万化に応じ，不動智の自由自在の境地を体感し，日常生活において恥辱とらない技及び道を習練するものであり，始は姿勢を正して数百の業に達した上で丹田の心気を養い，鉄石も砕く気象を具えて不動智に至り平常心を養うものである」とある。このように直心流柔術は業の修練を通して鉄石をも砕く気象を具えた不動心・平常心を養うことを目的としている。

この直心流柔術は，寺田勘右衛門正重満英（直信流柔道流祖）の門弟，寺田平左衛門正次は直信流を，吉村平助扶壽は起倒流を継いだ。この起倒流の流れを汲む滝野

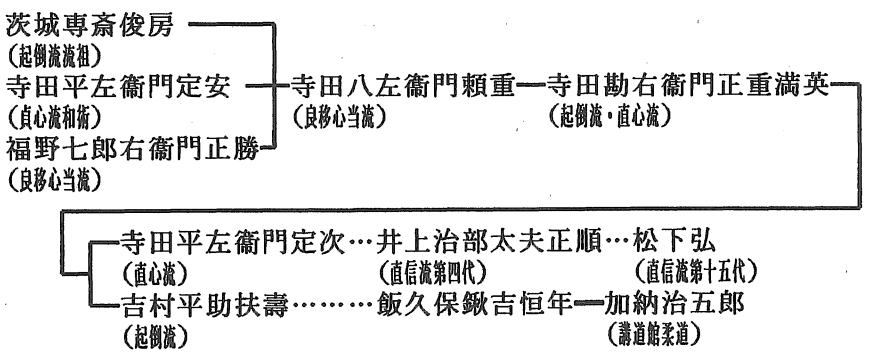
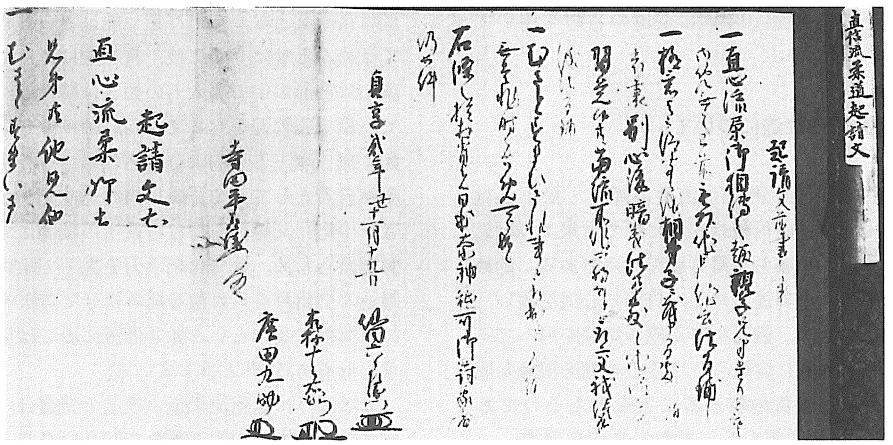
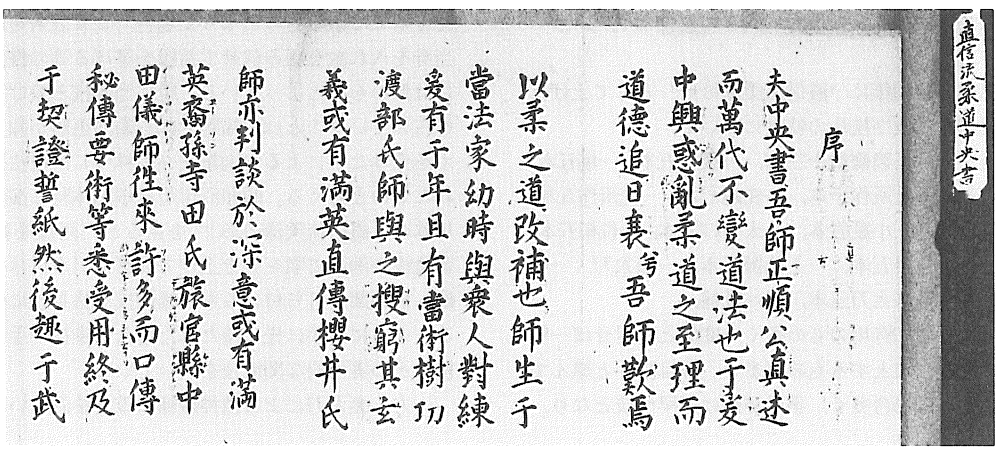


図１　起倒流・直信流系図（図説、古武道史、綿谷雪、青蛙房、Ｐ246参照し作成、1967）



写真①　起請文、梶川家蔵



写真②　直信流柔道中央書、序、梶川家蔵

遊軒貞高・竹中鉄之助一清・飯久保鍬吉恒年から加納治五郎へと伝えられた。

3．直信（心）流柔術及び柔道の名称について

直信（心）流の名称は，貞享２年(1685)に廣田九郎他が寺田平左衛門宛の起請文（写真１）にあるように直心流の名称が使われている。この起請文からも分かるように直信流柔道の創始以前に直心流柔術の名称が使われていた。この直心流柔術の名称は，享保６年(1721)に記された『直心流柔術応変』[14] に直心流柔術とある。従って，第三代井上九郎右衛門正永の代まで用いられ，“直信流柔道中央書の序”（写真２）に「夫中央書吾師正順公真述而萬代不變道法也干爰中興惑亂柔道之至理而道徳追日裵兮吾師嘆焉以柔道改補也」（門人堀江氏成音記，享保甲寅，1734年）[15] とあるように，第四代の跡目を継いだ井上治部太夫正順によって直信流柔道の名称が用いられるようになった。

また直心流柔術から直信流柔道への名称変更の理由として“萬代不変である直心流の道法が乱れたのを改め補完して再編成した”と言い，柔道の名称について直信流柔道業術寄品巻，柔第に「夫れ乾坤の間に性を稟くる者貴となく賤となく，寛柔温和の道徳は天然に備え有つ所なり。是れに随順する，これを目して柔道と謂う」[16] と記され，人の誰にでも自然に備わっている寛柔温和の徳性に従った処世法をすることを柔道と云うといって，講

道館柔道に先立つこと約170年前に柔道の名称を用いている。

4．直信流柔道の技法について

昭和12年（1937），第15代直信流柔道師範・松下弘は直信流柔道について「直信流は松江に於て古来より行ふ處の武道にして速かに勝ちを得る處の教えである。始めは姿勢を正し數百の業に達した上，丹田の心気を養い，進退の自由を為さしめ，鉄石も砕く處の気象を具へて不動体の位に至り毫も敵に容れられざるの心膽を鍛練し間髪を入るるなき所に勝負の岐るることを教えるのである」[17] と言って，まず姿勢を正して全ての技を習得し，丹田息のよる心気・心膽を鍛練して不動心の位に至って進退の自由を得て間髪を入れない勝負の機微を教えるのであると言って，開祖・寺田勘右衛門正重満英碑にある技の修練法や精神鍛練の目的に大きな変化はないようである。

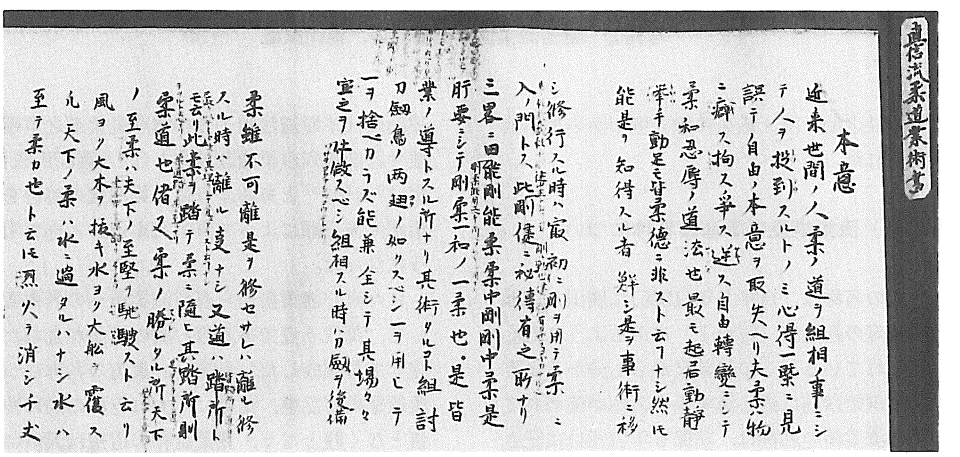
松下弘が昭和12年に“直信流柔道の形”として上げた直信流柔道の技及び技法の特徴について，

「一表十本，一箇條業十三本，一投技五本，一堪五本，一數投廻り，一亂所作十本，一変趣七本，一先所作五本，一小具足十本，一小亂五本，一太刀打五本，一位相五本，一仕掛，一下仕掛五本，一上仕掛五本，一裏太刀，一剱組討五本，一箇條太刀三本，他ニ亂捕，

右形は実際的に有用のもの多く一度敵と相対せば一撃の下に之を倒さんとするものが多い。業は相手と組んで後に之に掛ける場合多く，手足が動けば早や技となり，或は當身業となりて再び起つ能はざらしめ，敵我に迫りてせめんとせば立所に技，當身業によって先制する業，或いは右形の中で裏太刀の如きは精神鍛練の著しきもので，相手袋竹刀をもって立向い師は恰も猛虎のほえるが如く無二無三と真向より打込み来るを，我は磐石の如く泰然自若として刀を正眼に構へヂリヂリと迫り行く物凄さ（中略）又甲冑所作は古武士が戦場にて一騎打の状を髣髴たらしめ，さては相手刀を抛ちて組討となり急所を蹴込んで當身を入れ敵を組み伏せて首級をあげ之を君前に首実検に及ぶといふ如き他流に於ては見ることの出来ない形もある」[18] と言っている。

このように直信流柔道の技法の特徴は，相手を一撃で倒す技の威力，相手と離れて間合いを取って施す技の早技や当身技，又敵が攻撃してくれば，投げ技及び当身技によって先制する。さらに裏太刀による精神鍛練，そして甲冑での所作は戦場での一騎打ちの形態を取り，双方刀を捨てて組み討ちとなった場合，まず急所を蹴込んで当身を入れ敵を組み伏せて首級を挙げる等の技法は他流には無いものと言っている。特に当身技と投げ技が主流を占めていることは，福野七郎右衛門正勝が陳元贇の教えを受けた事による中国拳法（少林寺）の技法を取り入れたものと考える。昭和57年の島根国体時に演武された10本の「直信流柔道の形」[19] を見ると，両襟を持っての背負投や両手で顎を突き上げて後腰に引き付けて後方へ倒し後頭部を打ち付けるもの等投技や捨身技に優れている。さらに相手に先に持たれた場合当身技や手首技・肘技などの実用的な関節技を用いている。

一方，裏太刀による精神鍛練に重きを置いていることは


直信流柔道業術書

本意

近来世間ノ人柔ノ道ヲ組相ノ事ニシテ人ヲ投到スルトノミ心得一藝ニ見誤テ自由ノ本意ヲ取失ハ夫柔術ニ癖ス拘ス爭ス逆ス自由轉變ニシテ柔和忍厚ノ道法也最モ起居動靜挙手動足モ皆柔德ニ非スト云ナシ然ル能是ヲ知得スル者鮮シ是ヲ事術ニ移シ修行スル時ハ寛和ニ剛ヲ用テ柔ニ入ノ門トス此剛健ニ柔徳有之所ナリ

三畧ニ曰能剛能柔柔中剛剛中柔是肝要ニシテ剛柔一和ノ一柔也是皆業ノ導トスル所ナリ其術タルヨト組討刀劔鳥ノ両翅ノ如クスシン一ヲ用ヒテ一ヲ捨ヘカラズ能兼全シテ其場々々宜之ヲ作做スベシ組相スル時ハ勿論ヲ後備

柔雖不可離是ヲ修セサレハ離ル修スル時ハ離ル支ナシ又道ハ蹈所ト云ヒ此柔ヲ蹈テ柔ニ隨ヒ其蹈所剛柔道也偖又柔ノ勝レタル所天下ノ至柔ハ天下ノ至堅ヲ馳驅スト云リ風ヨク大木ヲ拔キ水ヨク大船ヲ覆スル天下ノ柔ハ水ニ過タルハナシ水ハ至テ柔カ也ト云ヒ然ル消シ千丈

写真③　直信流柔道業術書、本意、梶川家蔵

直信流柔道業術名目

發端所作

一止水　一巡勢
一力避　一逆仕
一權奪　一應疾
一運抱　一立從
一趨臨　一趨吏
以上

先取作

一天投
一冠投
一鞠投
一延投
一地投
以上

小亂

一奇流　一左返
一右轉　一操戾
一反搦
以上

居相

一羽劒　一微劒
一角劒　一高劒
一宮劒　以上

太刀相

一逸刀　一變刀　一切刀
一切身刀　一左輪刀　以上

與儀

一甲冑秘與取作　一早着
一面頰腋當一忍緒　一上帶
一六具碎　一具足切　一甲乙鎗
一要馬腰堅　一馬上投　一馬上太刀

井上次部太夫　正順
井上九郎右衛門　兌克
雨森次右衛門　行清
加藤氣堂　正昌
石原佐傳次　中和

梶川純太夫

天保八丁酉歳
十月吉日

内田治助殿

天保十巳亥歳
十二月吉日

内田所作殿

写真④　直信流柔道業術名目、梶川家蔵

「名を乱と名付，右之一巻を書して心持を沢庵へ御物語申せば，則起倒流とあそばし，習の心持に模稜手と名付給也」[20] また「物にふれ動かず，事あれば沈みて浮かばず，沈を感ずると云ふ。凡そ調息を要とす」[21] とあるように，沢庵禅師や陳元贇に大きな影響を受けているものと考えられる。

この様に直信流柔道は「最も起居動静挙手動足も皆柔道に非ずと云ふなし。然も能く是を知得する者鮮し是を事術に移し修行する時は最初に剛を用て柔に入の門とす。此剛健に秘伝有之取なり（中略）其の術たること組討刀剣鳥の両翼の如くすべし。一を用いて一を捨べからず。能く兼ね全して其の場其の場宜しく之を并做すべし。組相する時は刀剣を後備」[22]（写真３）とあるように，直信流柔道は日常の起居動静挙手動足も皆柔道の基本に関わり，これらを良く習得することが柔能制剛の技に通じる。その技は刀剣を両翼の如く用いる。即ち組討ちの時は刀剣を後備えとし，刀剣を用いる時は組討ちを後備えとするものである。この様に平常時の平服組討の技と共に甲冑組討に重きを置いた独特の技術内容を持っている。

そして「就中心体事技之根元而万業自是兆出透達雖然不至道器合和之極則何得應變自在耶」[23] とあり，これらの技法を十分に駆使する為には理に従順で内剛な心に従うことが術理の根元であり，理事一体とならなければ自由自在な身体の働きは得られないと言っている。

５．直信流柔道の技法の変化について

直信流柔道の技法を「直信流柔道業術名目」[24]（天保8年.1838 ）（写真４）に記載されている技で見ると次のようになる。

『右五列一表三拾五業』
発端所作（止水，巡勢，力避，逆任，運抱，權奪，應疾，立従，趦臨，趦更）10本，
先取作（天投，冠投，韓投，涎投，地投）５本，
小具足（縫割，附潜，抜押，重返，披落，留指，引分，臂廻，違掛，腕捲）10本，
以上，25本からなる鎧組み討ちの技，
位相（中剱，横巻，上剱，立薙，下剱）５本，
太刀相（白色刀，青色刀，黄色刀，赤色刀，黒色刀）５本，
以上，10本からなる刀剣の技，
『右五様隘業手段之數三拾也』
挌業10本，楯業５本，迅轉５本，試剱５本，剱業５本，
以上，30本からなる隘業（あいわざ），
乱所作（一投，二投，三投，四投，五投，一廻，二廻，三廻，四廻，五廻）10本，
變趣所作（片手採，両手採，片胸採，両胸採，片裙採，前腰採，後腰採）７本，
小乱（寄流，左返，右轉，操戻，反搦）５本，
居相（羽剱，微剱，角剱，商剱，宮剱）５本，
太刀相（逸刀，憂刀，切刀，切身刀，左輪刀）５本
以上，32本。

そして奥儀の『甲冑秘奥耿作，早着，面頬腋當，忍緒，上帯，六具碎，具　切，甲乙鎗，要馬腰撃，馬上抜，馬上太刀，馬上撲，船中撲折，鎧締，首上，首付，首實見』等の甲冑所作である。

この天保８年の「直信流柔道業術名目」に上げられている技を基にその変化を見ると，次のようになる。

まず直心流柔術と呼ばれていた頃の技法は「発端所作（止水，巡勢，力避，逆任，運抱，権奪，応疾，立従，走臨，走更）10本，先の勝（天之投，地之投，中之投，向之投，後之投）５本からなる鎧組討の技１５本，表太刀（白色刀，青色刀，黄色刀，赤色刀，黒色刀）５本，裏太刀（逸刀，変刀，切刀，切身刀，老輪刀）５本，五太刀（外峰谷，鷹返，沈刀，浮沈刀，刀凌擢）５本」[25] からなる刀剣の技15本の鎧組討・刀剣の技合わせて30本をみても分かるように，直信流柔道になって約85年後の天保８年(1838)には97本＋奥儀（67本＋奥儀）と大幅に増ている。これは小具足や位相等の平時に於ける平服による組討技が加えられたことによる。また安政３年(1856)の「柔術業術大目録」[26] には『奥儀の甲冑秘奥所作以下の事項』が欠落している。これは寛永・安政以後の西欧兵制の導入による武芸の様式化・集団化等幕末の時代背景，特に天保８年から安政３年の約20年間の社会的変化による軍事的要望などが大きく影響したのではないかと考えられる。さらに昭和12年の松下弘「直信流柔道の形」（雲藩武術直信流）では安政３年の「柔術業術大目録同様」“奥儀の甲冑秘奥所作以下の事項”がなく98本＋數投廻り，仕掛，裏太刀，他ニ亂捕となっている。特に形稽古中心の稽古法に數投廻りや亂捕等の形への導入は乱取り稽古中心の講道館柔道の影響を受けたものと思われる。

４．まとめ

１）起倒流及び直信流柔道の成立

柳生石舟斉宗厳の門人福野七郎右衛門正勝は，貞心流和術を寺田平左衛門定安に学び，柳生新陰流の剣理に内在する和に茨木専斎の協力を得て工夫し，良移心当流和を創始する。これに陳元贇より伝授された中国拳法の五

拳の技法や調息の法を参考にして改良・修正し，良移心当流（福野流）に付加した。これを寺田八左衛門頼重に伝える。

茨木専斎俊房は柳生但馬守宗矩の門人。福野の良移心当流を工夫改変し，さらに鎧組討，棒，居合，陣鎌などを付加して寛永14年（1637）乱を創始，これに沢庵禅師が起倒流と命名した。

寺田勘右衛門正重満英は父定安から貞心流和術を伝授，さらに叔父頼重より良移心当流（福野流）を学びながら刀槍弓馬及び諸家の戦法をも学ぶ。更に深山に籠り仙人より長生の方を伝授され，その用の万変にも応じ得る道を悟る。是より禅を沢庵禅師に，儒を林道春に学び，直心流柔術を創始した。

2）直信（心）流柔術・柔道の名称

直信流柔道以前に直心流柔術の名称が使われおり，享保6年の直心流柔術応変に直心流柔術とあることから，第三代井上九郎右衛門正永の代まで直心流の名称が用いられ，享保九年に第四代の跡目を継いだ井上治部太夫正順によって直信流の名称が用いられるようになった。

また直心流柔術から直信流柔道への名称変更の理由として“萬代不変である直心流の道法が乱れたのを改め補完して再編成し，名称を“人の誰にでも自然に備わっている寛柔温和の徳性に従った処世法をすることを柔道と言う”と言って，直信流柔道と命名した。

3）直信流柔道の技法について

直信流柔道の技法は，相手を一撃で倒す技の威力，相手と離れて間合いを取って施す早技や当身技，又敵が攻撃してくれば，投げ技及び当身技によって先制する。さらに裏太刀による精神鍛練，そして甲冑での所作は戦場での一騎打ちの形態を取り，双方刀を捨てて組み討ちとなった場合，まず急所を蹴込んで当身を入れ敵を組み伏せて首級を挙げる等の技法は他流には無い独特のものである。特に当身技と投げ技が主流を占めていることは，福野七郎右衛門正勝が陳元贇から伝授された中国拳法の技法（少林寺）の影響であり，裏太刀による精神鍛練の重視は沢庵禅師や陳元贇に大きな影響を受けているものと考えられる。

これら実用時の技法の実際は，組討ちの時は刀剣を後備えとし，刀剣を用いる時は組討ちを後備えとするもので，平常時の平服組討の技と共に甲冑組討に重きを置いた独特の技術内容を持っている。

4）直信流柔道の技法の変化について

直信流柔道の技法の変化を直信流柔道業術名目（天保8年.1838）を基に考察すると，直心流柔術と呼ばれていた頃の技法は，鎧組討・刀剣の技合わせて30本，直信流柔道になって約85年後の天保8年(1838)には97本＋奥儀（67本＋奥儀）と大幅に増ている。これは小具足や位相等の平時に於ける平服の組討技が加えられたことによる。しかし安政3年(1856)の柔術業術大目録には「奥儀の甲冑秘奥所作」以下の事項が欠落している。これは寛永・安政以後の西欧兵制の導入による武芸の様式化・集団化等幕末の時代背景が影響したのではないかと考えられる。さらに昭和12年の松下弘の直信流柔道の形の技は安政3年の「柔術業術大目録同様」“奥儀の甲冑秘奥所作以下の事項”がなく98本＋數投廻り，仕掛，裏太刀，他ニ亂捕となっている。特に形稽古中心の稽古法に數投廻りや亂捕等の形への導入は乱取り稽古中心の講道館柔道の影響を受けたものと思われる。

参考文献及び引用文献

1）加納治五郎，柔道一班並に其教育上の価値，渡辺一郎，明治武道史，人物往来社，P82，(1971)
2）同　上
3）大滝忠夫・竹内善徳他，論説・柔道，不昧堂出版，P21～22，(1984)
4）佐々木武人他，現代柔道論，大修館書店，p22，(1993)
5）福田明正，雲藩武道史，今井書店，p20，(1965)
6）藤堂良明他，直信流柔道について，武道学研究第22巻，第3号，P9，(1990)
7）柳生十兵衛三厳，月の抄，日本武道体系，第一巻，今村嘉雄，株式会社同朋舎出版，P217，(1982)
8）小松原濤，陳元贇の研究，雄山閣出版，P94，(1962)
9）日夏繁高，本朝武芸小伝，正徳四年（1714），山本家蔵
10）小松原濤，陳元贇の研究，雄山閣出版，P38，(1962)
11）同　上，P36
12）柳生十兵衛三厳，月の抄，日本武道体系・第一巻，今村嘉雄，株式会社同朋舎出版，p218，(1982)
13）同　上，p218
14）藤堂良明他，直信流柔道について，武道学研究第22巻，第3号，P9～P10，(1990)
15）堀江氏成音記，直信流柔道中央書の序，1734年，梶川家蔵
16）柔道業術寄品巻，柔第，梶川家蔵
17）松下弘，雲藩武術直信流，(1937)，島根県立図書館蔵
18）同　上
19）直信流柔道の形（島根国体・柔道の部，形演武の記

録，1982)，藤岡家蔵
20) 柳生十兵衛三厳，月の抄，日本武道体系・第一巻，今村嘉雄，株式会社同朋舎出版，p218，(1982)
21) 日夏繁高，本朝武芸小伝，正徳四年（1714），山本家蔵
22) 直信流柔道業術書，本意，梶川家蔵
23) 柔道業術寄品巻，柔第，梶川家蔵
24) 梶川純太夫，直信流柔道業術名目，天保8年（1838)，梶川家蔵
25) 福田明正，雲藩武道史，今井書店，p34，(1965)
26) 堤六蔵，柔術業術大目録，安政三年(1856)，渡辺一郎氏蔵，藤堂良明他，直信流柔道について，武道学研究，第22巻，第 3号，p12，(1990)